

# さらに開かれた大学を目指して

小樽商科大学長

山田 家正

略歴  
昭和34年 3月 北海道大学理学部生物学科  
(植物学専攻)卒業  
昭和39年 4月 北海道大学理学部助手  
昭和51年11月 同上 講師  
昭和53年9月-11月  
日本学術振興会ソ連科学アカデミー派  
遣研究員  
昭和54年 4月 小樽商科大学商学部助教授  
昭和55年10月 同上 教授  
昭和61年 7月 小樽商科大学短期大学部主事  
平成 2年 7月 同上 部長  
平成 4年 4月 小樽商科大学長、同短期大学部学長  
平成 8年 4月 小樽商科大学長(現在に至る)  
学位 理学博士  
専攻 生物学(植物学、藻類学)



小樽商科大学は21世紀の幕開けの昨年に創立90周年を迎えました。小樽市文学館で90周年展を開催しましたところ、37日間で二千二百余名の方々が訪れて下さいました。小樽高商以来の本学の歴史に関心を寄せて頂いたことに感謝しております。それだけ、本学は地元の皆さんと共に90年の歴史を刻んできたと言えるでしょう。言葉を換えれば、本学は小樽の歴史のひとつの生き証人であるとも言えると思います。

しかし、本学が丘の上にあることもあって、市民の皆さんが日常的に教職員や学生達と触れあう機会が多いとは言えず、地域に開かれた大学と言えるものではありませんでした。この原因のひとつは立地条件の他に大学の閉鎖性があったことは否定できません。大学の構成員が積極的に市民活動等に溶け込むというような例は確かにありますが、それは個人の考えに基づいている結果であって、大学という組織が地域社会で組織としての責任を果たすというところまでは出来ませんでした。

私達は、ここ10年ほど大学の新たな目標として、大学の基本的責務である研究のレベルアップと人材育成に加えて、「国際交流の進展」と「社会貢献」という旗を掲げて、その努力を続けてきました。それらは、附属図書館の市民への開放、留学生や派遣学生の増加、社会人大学院生の再教育、あるいはビジネス創造センターを通じての起業化への貢献

などとして実りましたが、この取組の間に市民の皆様をはじめ後志管内の方々、あるいは北海道経済の活性化を図るの方々からご支援とご協力を頂いてきたことは、私達にとって何物にも代え難い財産となりました。本学と地域の皆様との信頼関係が築かれ、何か問題が起これば大学に相談に来て下さることが非常に多くなってきたのです。

このように、大学の重い扉が少し開かれ、外の空気がキャンパスの中に流れるようになってきましたが、私はまだまだ扉の開き方が足りないと思っています。もっと扉を開くにはどうしたらよいか、皆で知恵を絞った結果が、このたび創刊する広報誌「ヘルメス・クーリエ」なのです。大学からの情報発信をもっと増やして、大学の動き、問題点、などを率直にお知らせし、皆さんの知恵もお借りして、大学の持っている知識、機能などをさらに活用して社会貢献の一翼を担うようにしたいのです。皆さんが本学をもっと利用して下さいれば、私達も気づかなかった活用方法が見つかると思います。税金で運営される国立大学は皆さんの大学なのです。いろいろな角度からご意見ご提言をお寄せ下さるようお願い致します。

この「ヘルメス・クーリエ」創刊の意図をお汲み取り頂き、皆さんと大学の間にある壁がさらに低く薄くなることを願って創刊号発刊のご挨拶と致します。